
RIPUREI..../

96ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RIPUREI /

【Nコード】

N4586T

【作者名】

96ちゃん

【あらすじ】

俺に取って、死は終わりではなかった。あの日、あの時に迎えたそれは——試練と言う名の始まりだった。これは天国へ逝く為の悪あがき。

過去・現在・未来（前書き）

初めまして。どうぞ、末永くよろしくお願いします。

過去・現在・未来

——あれはいつの頃だったのだろうか……

感情のままに人を殴り、暴力を以て痛め付け、従わせた自分の右腕。

それは利き腕であって、それと同時に唯一の武器であって、誰かを傷付ける為に存在した右腕。

だが、そんな右腕が今は幼い少女の手を引いて、確かな温もりに当てられている。

今の今までこんな事に使った覚えはないのだけれど、何故か今は少女を守るように握られている。

「どうして……」

それは力のない、まるで蚊の鳴くような弱々しい声で発せられた。

「どうして、知らない人と一緒に暮らさなきゃならないの……ねえ、どうしてなの？」

それは怯えを含んだ瞳だった。

その言葉が……その弱々しい瞳が伝えたい事は分かっていた。

どうして見ず知らずの人達——正確には今日知り合ったばかりの自分と女性ははが家に上がり込み、訳も分からぬまま同居しなければならぬのか、とそう言いたいのだろう。

——ああ、少女の言いたい事は良く分かる。

何故なら、これが初めてではなく二度目なのだから、それこそ嫌と言う程に良く分かると言う物だ。

仮に自分が逆の立場であつたのなら、間違いなく同じ反応をしていただろうし……そもそも自分は反対をした挙げ句に家出をした記憶があるぐらいなのだから、これで分からない方が可笑しいと言えるだろう。

だから、今は取り敢えずと——。

「わりい、俺から言える事はあんまねえーんだわ。だから家に帰つて、うちのお袋とお前の親父さんに聞こうぜ。んでまあ、それでもつてよ——」

それから改めて自己紹介をしようぜ、と今日から自分の妹になる少女へと笑い掛けた。

自分の母と少女の父が、お互いの親が選んだ再婚は余りにも唐突だった。

いきなりと言うべきなのか、または突然と言うべきなのか、まさに今のさっきに紹介されたばかりの赤の他人が明日から家族になるなんて、聞かされた側からしてみれば余りにも突拍子のない事を淡々と告げられた。

前もつての顔見せもされてなければ名前すら知らない相手との再婚を、自分は唐突に告げられたのだ。

こんな事を産みの親に対して言いたくはないのだから、それは余りにも突然で、余りにも身勝手だと言える。

しかし、当人達は何度も、それこそ何度も何度も悩み話し合つたのだと思う。

そもそも、母も再婚相手も互いに連れ子を抱えているのだから、それが当然と言えば当然なのだろう。

その上で二人が選んだ、「再婚」と言う一つの答えなのだろう。ならきつと、これが二人の見出だした幸せで、同時にこれからを見据えた選択なのだろう。

……だが、もし——もしも結末が同じなら、数年も経たないうちに破綻してしまう。

何せこれは、かつて一度通った道なのだ。

それだけに、この再婚が迎える結末が分かっている、胸の中には言いようのない不安が募った。

でも、それは酷く最近の事のように思えて、それと同時にとても昔の事のようにも思えて、それなのに——それなのにそれは、不思議と決して迎えぬ間違えた未来のようにも思えた。

なら、これはきつと一つの結果でしかなくて、つまりは過ぎ去った物なのかも知れない。

もし、明日を作るのは今日を生きた自分だと言っているのなら、今日が自分がどう生きるか次第で明日は決まるのだろう。

だったら自分は、母親の門出にぶちぶちと文句を言う訳にはいかないのだろう。

他人事ではないのだろうが、如何に母と言えど一人の人間だ。

その人にはその人個人の幸せがあつて当然だろうし、自分自身ただの子供ではないのだから、家族として母を見守つてやりたい。

勿論、だからと言って態々おべっかを取るつもりもなければ、無理をしてまで再婚者と仲良くしたいとは思わない。

ああ、そこらへんは流れ任せと、最低限の礼儀を持って付き合つていけば良いだと思う。

だから、ただ純粹に——昔も、そして今も変わらず女手一つで自分を育ててくれた母が、その母自らが選んだ相手と決めた選択ならば……“俺は”納得して受け入れてやりたい。

きつとそれだけで、たったのそれだけで、今は十分なのかも知れない――。

全ては一発の鉛弾によって終わりを迎え、同時に始まりを告げた。火薬の炸裂する渴いた音と、薬莢の落ちる高い音。そして、飛び散るピンクは赤と混じり赤黒く散らばり、火薬の烧ける独特の匂いを伴い雑踏の中に静寂を生んだ。

――人間は簡単に死ぬ。

今、一発の鉛弾によって頭を撃ち抜かれた男がまさにそうだとと言えるだろう。

これまで散々好き勝手に生きて来た代償か、または身勝手の利子や付けなのか、あまりにも呆気ない最後だと言えるのだろう。

……だが、これも因果応報なのだろう。

この男、いったい今までに何人もの人間を傷付け不幸にして来たのか、余りにも業が深った。

“まだ……死にたくない……”

自業自得だと、身から出た錆びだと言うのに、男はそんな事を願う。

死ぬのは怖くないだとか、自分は死なないだとか言っつて、今まで散々と思いがついていた男が最後に願った物は生だった。

死にたくない、まだ生きていたい、と何度も何度も声にならぬ心

の声で叫び、嗚咽を漏らしながら謝罪した。

“……すまない。許してくれ。やり直しを、償いをさせてくれ……”

自身の身勝手が生み出した顔も知らぬ被害者達にすがり付いて、
だらしなくも涙して、惨めにも懇願して――。

――そして、人間はこんなにも呆気なく、それこそ“いとも簡単に死ぬのだ”と思い知ったのだ。

――人生とは何だろうか。

それは、失敗と成功が織り成す物語りなのだろうか――。

――罪とは何だろうか。

罰とは……償いとは、いったい何を指すのだろうか――。

――愛とは何だろうか。

体面、外聞、偏見、それらを捨て去った先に存在する感情なのだろうか――。

――生とは何だろうか。

――死とは何だろうか。

――人は、家畜は――。

——過去でなければ未来でもない世界で神は告げた。
“罪深き人間に試練を”と、小さな使いへとそう告げた——。

RIPUREI・・・/

「——和真さんッ!」

桜舞う季節——それは春。

その春がもたらした麗らかなる日差しの下、義務教育の最終過程となる中学校の卒業式の日、上下黒のスエットを着たガラの悪い少年が声高々に前を歩く少年を呼び止めた。

「んあ、なんじゃい騒がしい?」

その騒がしい声に少年は足を止め、面倒臭そうな声で振り返った。その表情は、酷く眠たげだった。

「お、俺。深雪さんから聞いたんっすけど……か、和真さんが他所に行っちゃうって、本当なんすか?」

「ああ、その事が……いや、行っちゃうも何も俺は今年で卒業だし、他県の高校に行こうが行かなかるうが違う学校に通うだろ」

「そりゃそうっすけど……引越すってのはマジなんすか?」

「マジなんすか、って……んな事で嘘を言っても仕方ねえーべ」

言って少年——さかきかずま 榊和真は大きな欠伸をした。

「じゃあ、姉貴は……振ったって事っすか……」

俯きがちに、齒切れの悪い口調でスエットの少年は言った。
その言葉に和真は何も応えず、やれやれと肩を揺らした。

「ま、縁があつたらまた会つだろうさ……」

一応は里帰りもするつもりだしな、と呟いて和真はスエットの少年に背を向けた。

「———そんじゃあな。また、縁があつたら会おうぜ」

言つと同時に和真はクルリと背中を向け、少年へと手を振るつた。
ネクタイも着けず着崩された中学校の制服———学校指定のブレザーの下に、ワイシャツではなく半袖のボーダーシャツを着込んだ格好。

その見た目から容易に予想が付く“見たまんまの素行の悪さ”で、三年と言つ時間を過ごした学校を後にした———。

———もう10年も経つたのか……

人通りの少ない道を歩きながら、誰に言つてもなく和真は一人に呟いた。

あの日、あの場所で頭を撃ち抜かれた時、和真の生涯は終わりを迎えたはずだった。

しかし、朦朧とする意識のなか情けなくも願つた生への執着は、意外な事態へと発展を迎えた。

——まさか、五歳の時分まで時間が戻っちまとはな……

そう、何も終わってなどいなかったのだ。

何の奇跡か、死んだはずの和真がふと目を覚ました時その目が捉えた光景は、心配そうな表情で自分を窺う母親の顔だった。

その時、まるで夢でも観ているのだろうか、と和真は己の目を疑った。

それもそのはず、彼女は和真が17の誕生日を迎えた日に自宅のマンションから飛び降り自殺を図ったのだから——。

——お袋の顔はうる覚えだったはずんだけどな……

今だからこそ、ははは、と笑ってしまう。

案外覚えてるもんだな、と和真は笑ってしまう。
つと、丁度その時——。

「——何がそんなに可笑しいんだい」

回想に浸り思わずも笑顔を作ってしまった和真に、凜とした声で話し掛ける少女が居た。

「……テメエ」

最悪だとばかりに肩を落とし、和真は声の主に振り返った。

「毎度の事だがよう……心臓に悪いからいきなり現れんな、って何回も言ってたんだろーがッ」

「いやいや、そうは言われてもねえ……生憎と私はここで君を待つ

ていただけなんだ。そしたらたまたま、君が一人笑いながら歩いて来たんじゃないか。なのに私が悪いと言われてもどうしようもないだろうに……ああ、そうだとも。私としては、そんな事を言われても困ってしまうよ」

そう言って少女は、やれやれ、と首を振った。

その少女の仕草が、良く分からないが非常にムカつく、と思えた和真はあからさまな舌打ちをして返した。

「チツ——で、今日は何の用だよ」

「ふむ、何故か分からないけど君はご機嫌斜めなようだね……何かあったのかい？」

「ハッ、何かじゃなくテメエに遭遇したから苛ついてんだよ。神様の使い（自称）何だからそんなに察しろや」

「……何やら腑に落ちない部分があったけど、まあそこは良いよ。話しが反れるから、そこは聞かない事にしておくよ」

私は心が広くて優しいしね、と少女はしたり顔で頷いた。

その仕草に対し、やっぱりコイツはムカつく、と再び思った和真は深い深いため息を溢した。

「ハア……んで、本当に何の用で来たんだよ？」

「これと言って何がある訳じゃないんだけど、今日は君の卒業式じゃないか。だから心優しい私は君を祝う為に待ってたんだけど——ああ、勿論これは本題のついでだよ。だからそんなに嫌そうな顔をしないでくれ」

話しの途中——内容が卒業祝いへと差し掛かった辺りから、見る見る内に面倒臭そうな顔をしてさっさとこの場を去ろうと歩き出した和真に、少女は苦情しながら言い直した。

そんな少女に、和真は呆れを含ませた視線を向けながら言う。

「本題って言うアレかい……何時だかアンタが言ってた“天国へ逝く為の10の試練”とやらか」

「そうそう、ソレだよソレ。君の地獄行きを回避する為に慈悲深い神様が用意した、大変素晴らしい試練だよ。いやはや、良く覚えていたね」

うんうん偉い偉い、とばかりに頻りに手を叩いて、少女は満足げな笑みを浮かべた。

その笑みに和真は苛立ち、睨み付けるようにして両の目を細めた。

「オイコラ、こちらら機嫌が悪いんだ。テメエの御託は要らねえから、さっさと本題を話せよッ!!」

「ふふふ。私もまた随分と嫌われた物だよ……さて、柚和真——」

“——君に告げる。”

それは、人とは異なる存在が発した異質なる声——。

「——これは天命。これは神が君に与えた試練」

それは、限られた人間にだけ聞く事の許された言葉——。

「試練の期限は、来月4月の7日から再来月の5月の7日までの一ヶ月間。それまでに君は、望月早苗もちずき さなえと言う少女と友達になる事——もし、それが出来なければ……君には即座に死んでもらい、永遠の地獄へと逝つて貰う。ちなみにチャンスは一度切りだ。二度なんて都合の良い物はないから心しておくように」

「……………」

「試練の詳しい内容など、望月早苗と言う少女に就いては後日追つて説明する——以上。これまでに神の御告げである。それまでの間、悔いのないように日々を過ごしたまえ」

それじゃあね、と付け足すと少女は煙のように姿を消した。

「……………あいよ」

少女が消え去り最早誰も居ない場所に向けて、和真は小さくも確かに頷いたのだった……

RIPUREI・・・1／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4586t/>

RIPUREI.... /

2011年10月9日02時46分発行